

9月10日(土曜日) 特別講演

Yeats and the Science of Modernism

Daniel Albright

The young Yeats spent some years editing the poems of William Blake, and Yeats inherited much of Blake's contempt for science, Blake's sense that Newton was the devil who murdered the living cosmos and substituted dead mathematical abstractions. For all his life Yeats felt hostile to the extreme objectivism of Newtonian physics; but as he grew older he read popularized accounts of Einstein's work, and he came to believe that advanced scientific thought was starting to converge with Yeats's own philosophical beliefs Berkeleian and occultist. Yeats believed this partly because he misunderstood some of the ideas of recent physics. But scientists themselves were in fact trying to work toward a vision of reality congruent with poetry (Whitehead called Shelley an excellent scientist; Crookes considered that the ectoplasmic emanations from spirit mediums might represent a new state of matter). And in a certain sense Yeats was right: later developments in physics have shown that the act of measuring can actually influence the physical world, so that mind and matter are indeed a far more integrated system than Newtonian physics would allow.

In the course of this paper I will look not only at Yeats's philosophical writings but also at a number of examples from Yeats's poetry in which scientific ideas, such as wave vs. particle constructions of reality, are prominent.

9月10日(土曜日) 研究発表

“The Black Tower”を読むーリフレインを中心にー

佐久間 思帆

2003年九州産業大学で行われました年次総会で、ワークショップ『「塔」をめぐる 2篇の詩を読む』(松田誠思先生構成・司会)に参加させていただく機会に恵まれました。その節には、諸先生方から貴重なご意見を多数いただき、誠にありがとうございました。今回、“The Black Tower”を再度読む機会をいただきました。ワークショップで学ばせていただいたことから、自分なりに2年間考えたことをお話させていただければと存じます。

本作品の面白さは、塔を守る戦士の決意の強さと、リフレインでの風になびく骨のユーモラスな描写とのアンバランスな対比にあると考えております。この対比面白いのですが、いったい詩とリフレインとの関係はどのようなものであるのでしょうか。この点を切り口に、“The Black Tower”を再度考えてまいります。

編集者 A. E. からみた “Leda & the Swan”

藤田 佳也

イェイツの“Leda & the Swan”は、1924年6月 *The Dial* に、そしてその3ヶ月後の9月 *Tomorrow* にそれぞれ発表された。「ある政治評論雑誌の編集者から詩を書くように依頼され、私はレダと白鳥を書いた」とイェイツ自身の注にもある通り、元々この詩は A. E. の依頼を受けて執筆され、彼が編集長を務める *The Irish Statesman* に掲載される予定であった。しかし A. E. はこの詩を自分の雑誌に掲載するのを見送る。再びイェイツの自注によると「友人(A. E.)は『保守的な読者がこの詩を読んだら誤解してしまうだろう』と言っている」との記述がある。

A. E. の言葉は、彼が編集者として掲載不可という決定を下したことを示している。実は A. E. は、ちょうど“Leda & the Swan”の2回の出版にはさまれた時期に、ゲール語を必修科目とすべきかどうか、という話題を巡るイェイツのダイアローグ“Compulsory Gaelic”を *The Irish Statesman* に掲載している。2つのテキストの違いはどこにあるのか。

本発表においては、編集者 A. E. がイェイツの“Leda & the Swan”の掲載を取りやめた理由の一端を明らかにすると同時に、アイルランドのある政治評論雑誌の編集者の目を通してこの“Leda & the Swan”を考察することで、このテキストの背後にある1924年のアイルランドというコンテキストを探る端緒としたい。

結婚、エレジー、オカルティズム—— Yeats と Georgie

内田 有紀

Yeats の創作上の様々な局面やその変化を理解するうえで、彼と女性たちとの関わりという問題は無視することができない。多くの叙情詩が Maud Gonne へ捧げられたことや、いくつかの劇作品が Lady Gregory との共同作業なしではありえなかったことと同様に、1917 年の Georgie Hyde-Lees との結婚は、それ以降の彼の作品に決定的な影響を与えている。一般に、この結婚と Yeats の創作活動との関係については、*A Vision* 成立の直接的な契機として論じられることが多いが、詩作品における微妙だが確実な変化もまた見逃すことができない。Georgie との結婚は、Yeats の詩作品に、いわばジャンルの混淆とでも呼ぶべきものをもたらしている。たとえば、“In Memory of Major Robert Gregory” は、基本的にエレジーでありながら、夫の妻へ語りとしての全体的な構成を持っている。さらに、2 人の関係が、Yeats がそれまでのオカルト的関心を総括する詩作品を書く重要な契機となっていることにも注目した。この発表では、Yeats の、結婚をめぐる作品群を取り上げ、主題上、ジャンル上の微妙な変化について考察する。

William Blake と W. B. Yeats ‘memory’ をめぐる一考察

星野 恵里子

ウィリアム・ブレイク (1757-1827) は ‘memory’ について、『ミルトン』 (Milton, 1804-04) の序文では、‘the Daughters of Memory shall become the Daughters of Inspiration’ と述べ、また、『最後の審判の幻想』 (*A Vision of the Last Judgment*, 1810) においては、‘Fable or Allegory is Form’ d by the daughters of Memory. Imagination is surrounded by the daughters of Inspiration, who in the aggregate are call’ d Jerusalem.’ と語っている。ここから読み取れるのは、ブレイクは ‘memory’ をかなり否定的に見なしていた、ということである。

これは、イェイツが ‘our memories are a part of one great memory, the memory of Nature herself’、‘this great mind and great memory can be evoked by symbols’ と述べるところの ‘memory’ とは全く対照的であるし、‘memory’ そのものの概念が異なっているように思われる。

これらの ‘memory’ 観の相違、そしてそこから派生する、またその根源となっている諸問題について考察したい。

9月11日(日曜日) 研究発表

「若くて老いた女」を読む

山崎 みや

詩集『螺旋階段と、その他の詩』は1933年、イエイツが67歳の時に出版された。作品「若くて老いた女」はその中に収められていて、11章で構成されている。各章はそれぞれに多義的な内容を含みつつ、かつ相互に共鳴し合っていると思われる。

また、さらに深くこの作品と関わるためには、詩集『塔』の中の「若くて老いた男」と題される11章の詩とも向かい合わねばならない。なぜならこれらは対を成した作品であり、螺旋階段は塔の内部をも暗示しているからである。

ところで、イエイツがニーチェの著作を愛読していたことはよく知られているのであるが、とりわけ「若くて老いた女」という詩には、ニーチェの影が色を濃くしていると思われる。具体的な根拠として、ニーチェの代表作『ツァラトストラはかく語りき』の第一部に類似の題をもつ章が在る点に注目してみた。ここでは老婆の口を通してニーチェの女性観が語られているのである。したがって、これを手がかりにイエイツの「若くて老いた女」の一側面を読むことも、この象徴詩を理解する上で欠かせない作業だと考える。

この発表では、詩作上の父としてのニーチェに多大な影響を受けながらも、イエイツがどのような独自の詩的世界を展開していったのか、この連作を素材に述べてみたいと思う。

The Words upon the Window-pane における舞台表象について

佐藤 容子

The Words upon the Window-pane は、Yeats の劇作のなかでも数少ない散文劇であり、また舞台もダブリンのとある下宿屋に設定されるなど、Yeats が最もリアリズムに近づいた作品であるとされることもある。しかしそれはあくまで見かけ上のことに過ぎない。この劇作では、交霊会に集まった人々を前にして、Mrs. Henderson という霊媒の肉体を通して多様な声が出され、重層的な舞台表象を形作っていく。交霊会の参加者と劇の観客を深みに誘う支配霊 Lulu の声が始まって、Swift の愛人 Vanessa の声、Jonathan Swift の声が出す苦悶の響きに、Swift を愛したもう一人の女性 Stella が窓ガラスに刻みつけたという詩の言葉が対峙され、劇の結末では、交霊会の参加者がみな帰ってしまったあとで、トランス状態から戻った Mrs. Henderson の日常的な身体をなお突き破って、Swift の呪わしいつぶやきが出され、リアリズムの状況設定が完全に反転してしまう。

本発表では、このような *The Words upon the Window-pane* にみられる Yeats のいわば脱近代的な詩劇の舞台表象を、次の三つの角度から考察する。まず、Yeats がその詩作

品において彼の神秘哲学と対応させながらサウンド・シンボリズムを体系的に用いていると私は考えているが、この劇作においても、“b”音と“f”音を軸とするサウンド・シンボリズムはやはり重要な場面で機能している点を指摘したい。次に、両極を表す二人の女性の間で引き裂かれる一人の男という設定を中心にこの劇作を能舞台との比較において考察することを通じて、葛藤の完全な昇華をあくまで拒絶する Yeats 独特の作劇法について述べたい。能の形式に触発された Yeats は詩的言語、音楽、舞踏を総合させることを試みるが、この劇作では音楽（歌）は多用されるものの、舞踏は消えている。その中で、人生の多様な相が交錯する舞台を現前させるにあたって、「スピリチュアリズム」の精神風土が果たしている重要な役割についても触れたいと思う。

The King's Threshold 改訂の意義

山本 佳寿

The King's Threshold は 1903 年の初版完成・上演以来、度重なる改訂が行なわれてきた。そして 1922 年に至っては、それまでの版では死に至ることのなかった主人公の詩人 Seanchan の断食による抵抗が最後まで貫かれ、詩人が死ぬという大きな変更が加えられた。この点では、戯曲の原作となったアイルランド民話 *Sancaan the Bard and the King of the Cats* の結末と同様に、当初王が詩人の主張する〈詩人の権利〉を認め和解するという結末であったものが、詩人は権利をついに認められることなく死んでしまうという結末に換えられたわけである。イェイツは 1903 年当時から既に、詩人の死という結末を望んでいたと判断する根拠が無い訳ではないが、なぜ十数年後の 1922 年になって初めてそれを実行したのであろうか。1922 年といえば周知のとおり、アイルランドの自治・独立をめぐる多くの問題を孕んでいた年であり、1920 年には Cork の Mayor、Terence Macswiney よるハンガーストライキの末の獄中死事件も起こっていた。これらの出来事も彼の劇作に少なからず影響を及ぼしていると考えすることはできないだろうか。

今回の発表では、イェイツが置かれていた立場や彼の思想の変化、および時代状況に注目しつつ、彼が初版以降行ってきた改訂を *The Variorum Edition of the Plays of W. B. Yeats* に依拠し、細かく辿りながら、これらの改訂がイェイツのどのような意図を反映したものであるのか、また改訂の結果、この戯曲にどのような劇的效果が生まれることになったのか、というような点を中心に考察する。

“Lapis Lazuli” の明るさについて

三宅 伸枝

“Lapis Lazuli” (1936) は主題の重要性と広がり、そして構成の緊密さによってイェイツの代表作の一つであると言えるが、特徴はその明るさにあると思われる。それは“Among School Children”と同種の葛藤を突き抜けた明るさであって、“Among School

日本イェイツ協会第41回大会 要旨

Children”の明るさが生命そのものに同一化した喜びからくるものであるのに対して、“Lapis Lazuli”の場合は生命を称えることに向かう意志を確認したことからくる明るさだと言える。

詩に繰り返して用いられる“gay”という言葉よりもさらに強い“build”という言葉が前半の結び、核心の2行で用いられている。“All things fall and are built again / And those that build them again are gay” (ll. 35-36). この建てるという行為に、いずれは滅びる、死に至るという運命を受容したうえで、それでも生命に向かう強い意志が確認される。これを強固にしているのは個人・社会を超えた人間の運命が主題になっているからだと思われる。

詩人の視点の枠組みとして悲劇という設定がある。ここでイェイツが悲劇の本質として挙げる“tragic joy”の考えが思い出されるが、この詩においては恍惚感を伴う tragic joy ではなく、まさに文明が滅び行く瞬間に立会いながら、次に成すべきことを知り抜き、音楽という行為を通してそれに着手する人物群像が表しているように、生命の表出としての文化・文明へ向かう不屈の意志を表明している。

前半 36 行目までは場面や時の急な展開の中に芸術作品や過去の歴史を通して滅びに至る人間あるいは人類の運命と、その運命を受容したうえで創造へ向かう意志が提示される。後半 20 行においては石に刻まれた群像に刺激を受けて想像力が自由に働く。滅び行く文化や文明に寄せる限りない愛惜を越えて新しい創造に向かう意志に帰結する運びには、読む毎に予測を超える感動があるが、それは想像力の求心性がもたらすものだと考えられる。

9月11日(日曜日) シンポジウム

9月11日(日曜日) ワークショップ

“News for the Delphic Oracle”のおかしみ

荒木 映子

まず、なぜこの詩を取り上げるか、というと、独特の軽み、おかしみが気にいっていたからということがあります。それに、今までワークショップで扱われた詩が、社会情勢や個人的な体験を反映したものでしたので、そういうことをつきぬけたような詩を選んでみました。Harold Bloomはこの詩を`a genuinely playful poem`と呼んでいます。`playful`であることは確かだと思うのですが、どこにそれが表れているか、それがどういう性質のものであるか、という共通の視点に立って、発言者の方々にこの詩の読み(そ

れを通してイェイツは何を言おうとしているのか、なぜそれを用いなければならなかったのか)を披露していただくことにします。この詩には、イェイツの他の作品はもちろん、ミルトン、シェリー、ブラウニング等の詩、プッサンの絵、ギリシャ神話、ポルフェリオスのプロティノス伝等々のテキストが層をなして入りこんでいて、とりわけこの詩を読むにはコンテキストへと出ていく必要があります。古典的教養が大衆の市場へと投げ出されたポストモダンの試みと読むのか、パロディ性、カーニヴァル性、あるいはキツネを読み取るのか、この詩のおかしみを自由に論じていただくことを期待しています。

ワークショップでは、発言者(今年から、「講師」ではなく、「発言者」に変わりました)の話を一方向的に聞くのではなく、参加者との共同作業で学びあうことを目指します。発言者の方から質問を投げかけることもあるかもしれません。この詩をきちんと読んだ上で、おかしみを探求していくこのワークショップにどうか積極的にご参加ください。

生に意味が発生する瞬間 / おかしみが発生する瞬間

- “News for the Delphic Oracle” にみる「仮面」の詩法とパロディ-

木原 誠

フランク・カーモードの優れた表現を借りれば、人間は生まれるといきなり事の最中に突入り、死ぬときも事の半ばで死なねばならず、絶えず生の中間で宙づりにされているために自己の生を意味づけることができない。このため人は時計の音をチック・チックとは呼ばず、チック・タックと呼び、チックをささやかな「創世記」、タックをささやかな「黙示録」とし、詩的虚構作用によって始まりと終わりを疑似創造し、その虚構の枠組＝形式の中で己が生を意味づけようとすることになる。これを「ささやかに」ではなく大がかりな神話という装置を用いて行えば、イェイツが「仮面」と呼ぶところの彼一流の詩法となる。「仮面」とは、自らを一端存在の外に立たせ、そこから一方で、生が今まさに始まろうとする地点＝発生論的視点から、他方、生が終わった死の視点＝終末論的視点から生を意味づける詩的行為を指すからである。むろん仮面は本来演劇用語であり、そうすると「仮面」の生は、演劇の舞台という虚構の枠組みの中で演じられるところの生ということになる。だからこそ、この生は“playful”なものとなり、「演劇的意味に満ち」、同時に「(遊戯的)おかしみに満ちる」ことになる。このゆえに「ハムレットもリアも陽気なのである。」本発表は、このイェイツ的「仮面」の詩法の典型的表れを“The Statues”と“News”の間テキスト性の中に求める。二つを対として配列させることで彼は「仮面」を創造し、その間テキスト性の中で己が生を意味づけ、同時におかしみを発生させているからである。“News”のおかしみの発生は、前詩の冒頭で「ピタゴラス(=私)がそれ(=「仮面」)を計画したのだ」と記したとき予め決まっていたとみる。

“News for the Delphic Oracle” のいやらしさ

君島 利治

このワークショップの発言者に選ばれ、この詩をざっと一読した率直な感想は「何となくいやらしい詩だな」であった。何故そう読めるのか、そう読んでしまうのかは、私が Yeats の後期詩作品を読んでいく上で、詩人の老いと性の問題を常々テーマとして挙げてきたからだと思う。無論この詩は少ないながらも先行研究や詩集巻末の詳註などが存在し、sexual な要素は幾つか挙げられてはいるが、詩全体が卑猥だというような発言は認められていない。そこで、このワークショップでは、他の発言者の方が本来あるべき深い読み方を提示していただけるであろうから、思い切って自分なりの読みを提示したいと考えている。現時点(要旨執筆時)では未だ模索している段階であるが、詩中の性的(にとらえようと思えば可能)な描写、表現を頼りに、この詩の卑猥性を提示し、詩人がこの詩を書いた意図を推測し、この詩が“playful”であるという一面を探り出せればと思っている。しかしながら、詩人の老いと性の問題は、詩人にとってみれば深刻な問題なのであり、読み手は“playful”と受け取っても、本人は逆に真剣に扱わざるを得なかったのかもしれないし、そう考えればこの詩は詩人にとって大真面目な詩なのかもしれない。気をつけねばならないことは、私の発言そのものが“playful”になることであるが、フロアの諸先生には率直にご叱責いただければ幸いである。

“News for the Delphic Oracle” “のおかしみと祝福

萩谷 美佳

“News for the Delphic Oracle” が、遊戯性あるいはおかしみを表現している詩であることは、イェイツが詩形としてバラッドの韻律を選んでいることによっても明らかである。イェイツのバラッド形式の詩は、アイルランド文学復興に燃える文学的キャリアの始まりの時期においては、“The Ballad of Father O’ Hart” そのほかのような、フォークロア色の濃いものであったが、「仮面」の思想などを経て、聖と俗、天上と地上、あるいは魂と肉体というイェイツ詩の中心的モチーフである葛藤を扱い、“Crazy Jane and the Bishop” そのほかのような詩へと深化した。そして最晩年のこの詩、“News for the Delphic Oracle” において、イェイツのリテラリ・バラッドは、イェイツ詩におなじみの面々が演じるパロディに舞台を提供し、イェイツのあこがれてやまなかったアポロ的なもの、に対するディオニュソスの世界、あるいは美しく気高い魂、に對置される性愛と肉欲を、おかしみをこめて語ることによって、逆説的にこの俗界の生を祝福しているのである。“News for the Delphic Oracle” のおかしみとは、陰惨で悲しい現実を、様式化されたことばによる遊戯的空間に置いて楽しむということによって、人々に自らの存在している場所を再確認させ、再評価させていた、昔のバラッドと同じように、イェイツ詩コンテクストにおいて、秩序と混沌の拮抗を瓦解し結ぶものである。